

駅南だより

2026年6月号 Vol.91

文庫 (B)

えきなん
探検隊

第7回

本棚編

駅南一般書巡りは8回目。今回は棚番号14～16の「文庫」です。請求記号の頭に「B」がつきます。「文庫」は文庫A6判(105mm×148mm)の皆さまもご存知の手ごろなサイズの書籍です。専門的な知、そして古典、現代文学、さらにエンターテインメントまで幅広く手にして持ち帰り、何処でも読める書籍で、当館で一般書では稼働率が一番高いジャンルです。

棚番号14

棚番号15

棚番号16

文庫の棚へ出発！



総記 (B0*)
からスタート

棚番号14

B000～B800

1連目(ギャラリー側から)に総記(B0*)、哲学(B1*)、心理学(B14*)、倫理学(B15*)、宗教(B16*)、歴史(B2*)の本が並びます。2連目は地理(B29*)からの立ち上がり。ここには星野道夫さんの著書が入っています。さらに3連目からは社会科学(B3*)、自然科学(B4*)、技術(B5*)、産業(B6*)、芸術(B7*)、さらには語学(B8*)までと、総記の「知とは何か？」をテーマにした本から、論語、プラトン、アインシュタイン、ファラデーからダーウィン、さらに古典落語、井上ひさしさんの文章作法までと、人文・理工系の「知」が詰まった棚です。

棚番号14 (つづき)

B900～B913.6

3連目からは文学(B9*)です。世界文学案内や世界文学史から立ち上がり、日本文学(B91*)へ。詩歌(B911)に心ふるわせ、戯曲(B912)に酔ったら、ついに4連目で小説(B913.6)登場。ここからは作者五十音順にならびます。番号14の棚には「カ行」の著者までが並んでいます。

棚番号15

B913.6

引き続き日本の小説(B913.6)、「サ行」の著者から「マ行」の著者までが並んでいます。

ゴール

ギリシャ・ローマ文学
(B 99*)

棚番号16

B913.6～B990

引き続き棚番号16には日本の小説(B913.6)の「ヤ行」の著者から続きます。3連目はエッセイ(B914)。さまざまな日常の徒然が並びます。次の日記・紀行(B915)。荷風さんの「断腸亭日乗」はこちら。4連目から文学は世界へと広がります。中国(B92*)、英米(B93*)、ドイツ(B94*)、フランス(B95*)、スペイン(B96*)、イタリア(B97*)、ロシア(B98*)、その他(B99*)まで。7連目の最後は西欧文明の源ギリシャ・ローマ文学で終わります。

どんな本を読めばいいのか迷ってしまった時は、レファレンスカウンターでお気軽にご相談ください。

駅南バックヤードツアー

普段は皆さんの目に触れることのない
図書館の仕事の裏側をお見せします。

13. 館内整理日

市川市の図書館では、**毎月最後の平日**を**館内整理日**として休館にしています。
(ただし、7・8月は開館)「館内整理日は何をしているの?」と、気になる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

今回は、駅南口図書館の館内整理日の1日をご紹介します。

館内整理日は、ふだん利用者の方がいる時には出来ない作業が行われています。
ひと月分の新聞をまとめたり、書架の整理整頓も普段より丁寧に行っています。
資料が正確に並んでいるからこそ、探している本が該当の書棚で見つかるのです。
全体での打合せや連絡調整なども、この時に行います。



月に1度の館内整理日。みなさんが利用しやすいように、整理整頓・掃除をしています。



この日は全体での打合せの後、館内研修を行いました。学んだことを業務に活かせるように、スキルアップをしています。

司書の推し本!

駅南の司書たちのいま一番"推し"たい
本や作家をご紹介します!

夜の5分、スマホの代わりにエッセイを…! 司書〇の… **ハマった本!**

気楽に、日々の何かと何かの間に箸休めのように読む(そんな表現をすると失礼かもしれないが)おすすめの日記エッセイを3冊をご紹介します。

1冊目は翻訳家のみならずエッセイスト・作家としても活躍する村井理子さんの『ある翻訳家の取り憑かれた日常』

翻訳家としても多忙を極める中、双子の子育て、義父母の介護、出版イベント、また料理(本も出版するほどの料理上手)、読書、等々怒濤のような日々を記録されている。翻訳家の日常というのも興味深く、臨場感のある翻訳の現場が少し垣間見れたりする。

2冊目は文芸評論家として著名な加藤典洋さんの『小さな天体 全サバティカル日記』
当時大学の教員だった加藤典洋さんが2010年4月から翌年3月末までサバティカル休暇(特別研究休暇)を得て国外で過ごした際の記録である。デンマークのコペンハーゲン、アメリカのサンタバーバラそして日本へ帰国してからの1年間が記されている。

着いて早々の引越しの苦労話、家族や友人との食事の様子、読んだ本の事、休暇期間中も続く評論家としての仕事。日常の様子を丁寧に時にはユーモアを交え自分の言葉でもって書いている。海外での滞在記としての興味深さもあり、読みごたえのある一冊です。

3冊目はこちらで紹介するまでもなく多方面で紹介されている武田百合子さんの『富士日記』
夫、武田泰淳、娘の花とともに富士山麓で過ごした日々が飾らない文章で綴られている。
読みたいなと思いつつ実際に読んだのは最近のこと。食事の献立や買い物メモ(値段まで細かく書かれている)近所の人とのやり取りといった生活の記録が読んでいて心地よく、余計なもののないシンプルさが秀逸。上・中・下と三巻あるこちらの日記、実はまだ読み途中。
読む楽しみを残している。



『ある翻訳家の
取り憑かれた日常』[1]
村井理子 著
大和書房 刊
X914.6/ム (市内所蔵あり)



加藤典洋 著
『小さな天体
全サバティカル日記』
新潮社 刊
X915.6/カ(市内所蔵あり)



『富士日記』上
(中公文庫)
武田百合子 著
中央公論新社 刊
B915.6/タ/1(駅南所蔵あり)

司書たちの休息

駅南の司書たちの日常や、好きなこと、
おすすめなどを伝えます。

毎日ちまちまと書くことを続けている。日記は今年で3年目になった。それ以外にも、天気や気温、睡眠時間に体調や気分、食事記録と、ノートをあれこれと使い分けながら書いている。スマホのアプリなどで記録を残すこともできるけれど、消費したいノートもあるし、何より目に見えて記録が埋まっていくことが楽しい。食事記録は、沢村貞子さんの影響も少しある。毎日の献立を書いていた沢村さん。私は朝・昼・夜の3食とおやつに食べたものを書いており、今年で2年目に突入。やたらとお菓子を食べている日もあれば、今週はお肉多いなとか、刺身の日のご飯2杯必須になっている…なんて、書いたものを客観視できるのが記録のいいところだ。今年は1歩進んで、「まごわやさしいよな」が出来ているかのチェックを増やした。豆類、ゴマ、わかめ（海藻類）、野菜、魚、しいたけ（キノコ類）、いも類、ヨーグルト、ナッツ類の頭文字をとったこの言葉は、バランスよい食事になっているかの目安でもある。毎日チェックしているけれど、キノコ類とナッツ類がなかなか摂取できず。1月から始めて、9項目が全て摂取出来た日は4回のみである。ううむ、案外バランス良くて難しい。面倒だな～と思う日もあるし、別にサボってもいいのだけれど、結局続けた記録を見たいという気持ちが後押しするようで、今日もペンを取り、記録を書く日々である。(W)

展示・イベント報告



AIアプリを楽しく活用しよう スマホ版(5月30日)

今話題の生成AIの使い方や調べものなど、Geminiを操作しながら分かりやすく教えていただきました。(27人が参加)



親子でうたっておしゃべりしてあそぼう 手あそびわらべうた(4月19日)

わらべうたのリズム・メロディーを通して、パパ・ママ・赤ちゃんが、みんな笑顔になりました。(子ども10名 大人11名が参加)



天井プラネタリウム 春の星座と2026年天文イベント(3月28日)

I-linkホールがこの日限りのプラネタリウムになりました。講師の荒井先生の解説を聞きながら、楽しんで学んでいただきました。(子ども10名 大人10名が参加)

編集後記

6月は一か月にわたりお休みをいただきました。システムの入替えも終了。この休館前後にいろいろとお問い合わせをいただきました。皆さまの生活の場として駅南が活きているのだと感じ、申し訳なく、かつ有難く感じました。また今まで通りに皆さまのお越しをお待ちしています。(館)

市川市市川駅南口図書館 (指定管理者 (株)ヴィアックス)

〒272-0033 市川市市川南1丁目10番1号 I-link タウンいちかわ ザ タワーズ ウェスト3階
【TEL】 047-325-6241 【HP】 <http://www.ekinan-lib.jp>

今月号の和洋女子大学との連携企画は、社会保障・社会福祉が専門の岸田宏司先生からお話をいただきました。神話の話や障害者福祉を切り開いた第一人者である糸賀一雄さんの言葉などから「なぜ社会保障や社会福祉が必要なのだろう？」と、考えるきっかけになるようなお話です。



私たちは普段、「支える側」と「支えられる側」を分けて考えがちです。介護や障害福祉でも、「助ける人」と「助けられる人」という見方が当たり前のようになっています。しかし、本当にそうなのでしょうか。私は、むしろ弱い立場にある人たちがこそ、社会を人間らしく支えているのではないかと感じています。

日本では高齢化が進み、介護保険制度の給付費は11兆円を超えました。そのため、「社会保障の負担が重い」という声も聞かれます。しかし、これは単なる負担ではなく、「誰も見捨てない社会をつくろうとした結果」だと思います。人は誰でも老い、病気になり、支えを必要とするからです。弱さは特別な人だけの問題ではなく、人間にとって自然な姿です。

ユダヤの伝承には、「世界には36人の隠れた義人（人知れず善を行う人）がいて、その人たちがいるから世界は滅びない」という「足萎えウーフニック」の物語があります。彼らは英雄ではなく、無名の普通の人々です。この話は、「弱い存在こそが社会を支えている」という逆転した視点です。その存在によって、周囲の人が優しさや思いやりを学び、人間らしさを保っているのです。



経済学者のアマルティア・センは、人間には「幅」があり、誰もが支える側にも支えられる側にもなると語りました。哲学者のジョン・ロールズは、自分が弱い立場になるかもしれないと考えれば、人は安心して暮らせる社会を選ぶはずだと論じています。また、思想家のピョートル・クロポトキンは、「助け合う種ほど生き残る」と述べました。

福祉の現場では、認知症の高齢者が配膳を手伝い、障害のある方が周囲を和ませる場面が数多くあります。支援されるだけでなく、その人自身が周囲を支えているのです。そこには、効率や生産性では測れない、人と人とのつながりがあります。誰かの弱さに触れることで、相手を思いやることを学びます。

福祉実践家の糸賀一雄は、「この子たちを世の光に」という言葉を残しました。支援が必要な人を守るだけでなく、その存在そのものが社会を照らしている、という意味です。社会福祉とは、弱い人を特別扱いすることではありません。誰もが弱くなる可能性を持つ社会の中で、お互いを支え合いながら生きていくことです。弱さを排除する社会ではなく、弱さを包む社会こそ、本当に強い社会なのだと思います。